

ナイト
守って、騎士様!
Momoka & Kyouusuke

三季貴夜
Takaya Miki

termity



エタニティ文庫

目次

守って、
騎士様！

5

女王様仰せのままに

315

書き下ろし番外編 ナイトのお仕事

333

守
っ
て、

騎^ナ
士^イ
様^ト
！

プロローグ

講義終了のチャイムが予備校中に響き渡る。

その音を聞かされたときに、桃香は学校と名のつくところのチャイムはどこも同じ音なんだ、としみじみ思う。

桃香はテキストをしまい、教室を出た。

「あ、桃香ちゃんせんせーだ。相変わらず清楚なお嬢様って感じだよな」

「上品だし、今時いない大和撫子？」

廊下に出たとたん、男子生徒達のひそひそ話が耳に入る。

「ほんと、大崎先生いつも上品だよねー。おしとやかかってやつ？　ちよー懂れですう」

と、女子生徒に面と向かって言われ、桃香は微笑んだ。

「まあ、ありがとう。でも上品だなんて、とんでもないですわ。私なんてまだまだいたらないところばかりですよ？」

本当の私はこんな上品じゃないんだけどねー、と桃香は心の中で舌を出しつつ会釈

した。

素の私を知ったら、みんな引いちやうかな？

桃香はそんなことを考えながら、柔らかな布地のスカートを翻して職員室に向かった。

カチ。カチカチ。

ワンルームの部屋にマウスのクリック音が響いている。

バキッ。ドスン。

そんな効果音もパソコンのスピーカーから流れ出てくる。

画面には『クイーンピーチは計一三三〇の経験値を取得』『ビッグワーム掃討作戦が終了しました』のテロップ。

「よっしゃ、全部狩るのに五分かからなかった」

桃香はマウスで自分が操るキャラクターをモンスターが出没しない地点まで移動させた。そして椅子の上にあぐらをかいて画面を見つめる。

その姿は昼間に予備校で上品だとか大和撫子と言われている桃香とはまるっきり違う。

大和…クイーンピーチさん。攻撃力ハンパねえす。

喪男…さくさく討伐できました。姉御と呼ばせてください。

コロくん…女王様どこまでもついでいきます。
大和…うおー経験値も高いー。

パソコンの画面上部のチャット欄に、クイーンピーチこと桃香を称える言葉が表示される。

クイーンピーチ…それほどでもない。私だって一人じゃ狩れなかったよ。ありがとう。そしておつかれ。

桃香はチャットにそう書き込む。

MMORPG——大規模多人数同時参加型オンラインRPG——。最近桃香が一番ハマっている趣味で、唯一のストレス解消法だ。

そのゲーム世界の仲間達とチャットしながら、モンスターを討伐するのが楽しくて仕方ない。日常の嫌なことを忘れられる。

それに、何より……

桃香は自分のキャラクターの周囲に集まったパーティーメンバーに視線を移した。

大和は白魔術師で白いドレス姿の女キャラクター。喪男は魔道士で黒いパンツスーツ

姿の男キャラクター。コロくんはエルフで皮の鎧を身に着けている女キャラクター。クイーンピーチである桃香はゴスロリ風の衣装を身にまとった女剣闘士だ。そして……

ナイト…ピーチさん、今日も本当に無敵でしたね。

盾と剣を持った聖騎士の男キャラクター。彼がそう発言しながらにこりと笑った。もちろん表情のコマンドを操作したから、にこりと『笑う』のだが、桃香は彼の言葉と表情にキュンとなってしまう。

彼の名前はナイト。ナイトはゲームを始めてすぐに知り合ったクイーンピーチの友達だ。

ただし男キャラクターだからといって、それを操作している人物が男性とは限らない。女かもしれないし、小学生、あるいは桃香の両親くらいの年齢かもしれないのだ。しかし桃香はナイトに恋にも似た感情を抱いていた。

クイーンピーチ…ありがとー。でも白魔術師や聖騎士がいないと、私死んじゃうよ？ 剣闘士は回復魔法も全体魔法も使えないしさ。やっぱみんながいたから討伐できたんだよ。だいたい今日は下手な攻撃して、だちかん。

本当はナイトにだけお礼を言いたかったけれど、そんなわけにもいかななくてそう書き込むと、コロールくんのチャット画面に『???』が並んだ。

喪男…だちかん？

魔道士の喪男にもツッコまれて、桃香はマウスを握ったまま、あっと小さく声を出していた。『だちかん』とは富山弁なのだが、一般的に通用する言葉だと思いついて入ったのだ。

クイーンピーチ…あ「だちかん」って使わない？ ごめん富山弁だけど……。」「駄目」って意味。ってか、富山近県の人いないんだー。

桃香は関東の人間だ。しかし、子供の頃母親が長期入院をしていて、その間富山にある父方の祖母の家に預けられていた。富山にいたのは小学校三年の半ばまでだが、そのせいで、大人になった今でも時折富山弁が出してしまう。

祖母が今時誰も使わないだろう、というほどコテコテの富山弁を常に口にしてきたからかもしれない。

『私関西』『俺北海道』など、桃香の発言の後にみんなのコメントがつく。

やっぱいいなー。

桃香は微笑んだ。

リアルではなかなか知り合えない遠くに住む人達と一緒に遊んだり、チャットを通しておしゃべりしたりできるのが楽しくて仕方ない。

桃香がオンゲと呼ばれる、この手のゲームにはまっている理由の一つでもある。

その他の理由としては、予備校にいる時のように上品な自分を演じなくてもいいし、モンスターを討伐した時の爽快感がたまらないからだ。

ナイト…ピーチさんは富山の方なんですか？ 知らなかったな僕。

クイーンピーチ…てへぺろ。

ナイトにそう発言されるとなんとなくすぐたたくて、つい、チャット画面にそう入力してしまった。

てへぺろ、だなんて若い子が使う言葉を使ってしまい、さらに照れくさくなった桃香は話題を変える。

クインピーチ…さてと、私これから火洞窟ダンジョンの討伐仕事受けたから、そっち行く。ほんと、おつかれでした。

大和…あい。うちは落ちるー。またー。

喪男…俺は他の友達と約束したからそっち行きまーす。またよろです。

コロルくん…おつおつ。

喪男…おつさまでした。

など、お疲れ様を意味する略語を交えて、チャットで皆それぞれに挨拶をし、画面から去っていった。

ナイト…では、僕も失礼しますね。おつかい仕事を抱えているので……。でも何かあったらいつでも呼んで下さい。すぐに駆けつけます。

『お辞儀』をしながらか、ナイトも桃香のいる画面からいなくなった。その瞬間また桃香はキュンと胸をときめかせる。

なんていうことのない挨拶と言葉。だけど、ナイトはいつも礼儀正しくて、桃香がゲーム内で困っていると、言葉通りいつでも駆けつけてくれるのだ。

他の仲間はお疲れ様を『おつ』と言ったり、ありがとうを『あり』と言ったり、よろしくを『よろ』と言ったりと、ネット界特有の略語を使うのだが、ナイトは一切使わない。そういうところにも桃香は好感を抱いている。

いつからだろう。そんなナイトに恋にも似た想いを抱くようになったのは。

相手は見ず知らずの他人。年齢も性別ももちろん顔だつてわからないのに、どうしてもナイトに心が傾いていく。

馬鹿だなー。私。

自嘲ぎみに唇の端を上げてしまう。それから火洞窟へ移るため、マウスを操作する。

一瞬真っ黒になった画面に、自嘲の笑みを浮かべた桃香の顔が映った。

風呂上がりだから頭にタオルを巻いたままだ。もちろんノーメイク。肌のきめは細かいけれど、最近目尻に微かな皺かすがあつて、老けたなと思ったりする。

黒いモニターに映る顔はよけいに老けて見えて、桃香は「はあつ」とため息を吐き出した。

もう二十七だしな、私も……

目もそこそこ大きいし、美人とは言い切れないけどそれほど悪くもないと思っていた。けれど、美容に気をつかわなきゃいけない歳だ。今日はもう寝よう。睡眠不足は美容の大敵だということはわかっている。

そうわかっていながらゲームをやめられない。

火洞窟に移り、さっそくモンスターを狩り始める。パーティーを組まずに一人でやるソロ狩りだ。

「ぎゃっ！」

罠にはまり、一人では倒せないレアモンスターと遭遇してしまい声を上げる。

やばっ、どうしよう……

だけどもためらったのは一瞬。

攻撃コマンドを入力する。それから、桃香は慣れた手つきでチャットに書き込む。

クイーンピーチ…やばっ。火ボスが出た。ちよっ、ソロ無理。

火ボスと呼ばれるモンスターは、パーティーを組まないと倒せない相手だった。

だから桃香は、ゲームにログインしているプレイヤーに向かって応援を求めするためにチャットに書き込んだのだ。

チャット画面には発言者の名前も表示される。その名前をクリックすれば、ダイレクトチャットもできるし、そのプレイヤーがどこで戦っているのかわかる仕組みになっている。

『ピーチさん。大丈夫ですか？』

即座に反応があったのはナイトだ。ダイレクトチャットで桃香に聞いてくる。

『うおー。やばい。助けてナイト』

『今行きます。僕が行くまで持ちこたえて下さいね』

『りよ』

了解という言葉を省略して、そう打ち込み、桃香は粘る。

豆…火ボスですか？ いきまーす。

BE L…経験値ウマウマ。

榎本…今、行きます。

などという書き込みがチャット画面に次から次に流れるが、桃香はナイトだけ来てくれれば、怖くない、と思う。実際はナイトだけ来てでも倒せないのだが……

早く来てナイト！

切実にそう思いながら攻撃コマンドを入力していると、ナイトが戦いに参入してきた。画面にはお互いのHP残量ゲージが表示される。ナイトは桃香のキャラクターのHPが少なくなっているのを確認したのか、モンスターの攻撃から盾で庇ってくれる。

頼もしいなナイト。本当に私、守られてる気がするよ……
 ナイトの魔法で回復されると、心まで癒されている気分になる。まあ桃香のキャラは一番攻撃力が高いから、守られたり癒されたりしても、モンスターにとどめを刺すのはいつも自分自身なのだが。

クイーンピーチ…ありがとう。ナイトのおかげでとどめ刺せた。このお礼は身体で返すね。

ナイト…またそれですか？ 本当に僕一人じゃ狩れない時はぜひ、身体を張って協力してくださいね。

初めてナイトに助けてもらった時、「身体で返す」という言葉を桃香は「身体を張って戦ってお礼する」という意味で使ったのだが、真面目な性格らしいナイトにかなり真剣に悩まれた。でも今は、ナイトもちゃんと意味をわかってくれている。

でも本当に身体で返せたらいいんだけど……と、桃香は変な想像をする。

桃香の中でナイトはとても爽やかな好青年なのだ。笑うと白い歯がきらりと光るようなイメージを思い描いている。

男性とのお付き合いはここ数年ないけれど、ナイトならいいかも、と考えてしまう。

クイーンピーチ…もちろんだよ。

ナイト…でも、ピーチさんを守るのは僕の役目ですから。僕がちゃんと守りますから。ぜったい守りますから。

あー。もうナイトだったら。こういうのもたまらない。

桃香はパソコンの前でにやつく。何がたまらないのか、具体的に説明しろと言われても無理なのだが、とにかくナイトを気に入っている。

それになんとなく、子供の頃よく一緒に遊んでいた年下の男の子を思い出すのだ。

名前も顔も思い出せないけれど、弟みたいな存在だった気がする。確か家がお寺で……。その子に泣きながら『桃香ちゃんを守る』と言われた。

あの子も今頃はナイトのようになってるんだらうか？

桃香は画面の中で『お辞儀』しているナイトに、幼馴染みのその子の面影を少しだけ重ねていた。

「ふああー」

予備校の廊下で桃香は大きなあくびをした。

今日はゆるふわのセミロングの髪を両サイドで編み込んで後ろで留めている。スーツは淡いクリーム色で、清楚かつフェミニンなスタイルで決めてみた。

胸元の講師の名札が今日のファッションを台無しにしていると思うけれど、仕方ない。それよりも、大口開けてあくびなんて……おしとやかなイメージを崩しちゃ駄目だ。慌てて周囲を見回す。

今の誰にも見られていなかったよね？

うん。大丈夫。誰もいない。

でもまたあくびが出そう。

今度は忘れずに口元に手を当てて、かわいらしく口を開いた。

昨夜ゲーム上で『うおー』と叫んだり『りよ』とか略語で発言していたりした自分とは真逆の雰囲気。そんな自分に、今日もちゃんと「化け」られていると桃香は満足する。

上品なイメージを崩さないようにしないとね。ボロがでないように今まで頑張ってきたんだもん。この職場でも地を出さないようにしなきゃ……

そう自分に言い聞かせていた時、すれ違った女子生徒から声をかけられた。

「あ、大崎先生、今日も女子力高めのコーデですねー」

学校からそのまま来たのだから。制服を着ている。

「まあ、ありがとう。あなたも素敵よ。学校の制服を着崩していないのが何より素敵だよ」

桃香は優しく微笑んでみせる。昔はこういう微笑みを浮かべるのが苦手だったけれど、もう慣れた。

清く正しく美しくをモットーに掲げた女子高の教師を務めていたおかげかもしれない。とにかく乱暴な言葉は使わない。

「常に清潔感のある身だしなみを心がけて、女性らしさを忘れないようにしましょう」

そんな校訓を掲げる学校だったから、桃香も生徒の手下になるように過ごしてきたのだ。

今の予備校に勤めるようになってからも、桃香は変わらず清楚で優しい教師の顔を作っていた。

前の高校でも生徒達から大崎先生は素敵だって言われてたっけ……

学校が潰れさえしなければな。

桃香は以前、歴史も伝統もある私立女子高の教師をしていた。だが年々生徒数が減少し、今年の春にはついに経営悪化で学校が閉鎖されてしまったのだ。

本当なら今頃学年の副主任になっていたはずだけれども、学校自体がなくなってしまうために、地元を離れて東京の予備校講師になった。ちなみに専門は日本史。

でも正規採用ではなく契約講師だから、まだ一、二年生のクラスや、Fランクのクラスしか担当できない。講義も週に四回で、午前中だけで終わる日や、今日みたいに夕方のひとコマしかない日もある。

正直言って薄給。だが、実家がある地元の子葉では他に教師の口がなかったので、思い切って東京に出てきて、この職についたのだ。

「生活指導までするんですか？　ここは予備校ですよ？　さすがにお堅い女子高の教師をされていただけありますね」

せめてもう少し講義数を増やしたいと考えながら、笑顔で生徒を見送っていると、背後で声優かアナウンサーかと思うような美声が聞こえた。

桃香はその声が、いや、その声の持ち主が大嫌いなので、思わずしかめっ面をしてしまった。そのしかめっ面を無理矢理引っ込めて振り返る。

「おはようございます。山室先生」

そこには高級スーツを身にまとい、メタルフレームの眼鏡をかけた山室京介きょうすけが立っていた。

桃香の勤めるこの予備校の数学の人気講師だ。

背が高く、スーツの上からでも引き締まった身体をしているとわかるくらいスタイルがいい。そのうえ切れ長で綺麗な二重かたえ。鼻筋も通っていて、非のうちどころがない面立おもだちをしている。

そのクールな見た目とメタルフレームの眼鏡のせいで、エリートサラリーマンのようにも見える。

彼の講師としての実力を知らない人からすると、美貌だけで人気講師の座を得た、と思うだろう。が、彼がもてはやされるのはこの容姿だけが理由ではなかった。

わかりやすい講義でこの予備校から大量の国立大や有名私大への合格者を出している。テレビのクイズ番組のレギュラーも持っているし、こうすれば東大に受かる、という内容の著作物まで出していた。

しかも京介は大学を出てたった一年で、それだけの実績を作ってしまったのだ。

なんとかして彼の講義を受けたい、と彼目当ての入学者が殺到し、彼の講義を受けるための選抜試験もあるという、いわばカリスマ予備校講師だった。

「あくびをしていらしたけれど、寝不足ですか？　もう午後五時だというのにまだ眠い

のですか？ あなたの講義はこれからでしょう、しっかりなさって下さい」
 さっきのあくびを見られていた？ 大口を開けていた方？ それとも……
 どっちにしろ嫌なところを見られた、と桃香はきゅつと唇を噛み締める。
 それから京介を睨みつけたくなるのをぐつと堪えて、微笑みを浮かべた。
 「あら、みつともないところをお見せしてしまって申し訳ないですわ。実は少し寝不足
 なんです。昨日ちよつとしたテストをしたので、その採点と、それぞれの生徒の能力を
 どう伸ばすかを考えていましたの」

微笑みを絶やさず、なるべく柔らかい印象になるように心がけつつ、桃香はしゃべる。
 実際の寝不足の原因は昨夜ゲームを遅い時間までやりこんでしまったせいだ。

「契約講師でFクラスがメインとはいえ、色々大変なんですわ。ご苦勞お察しいたしま
 す。きちんと受験に向き合っている生徒ばかりではないでしょうし」

このっ、ダラにしてんのかっ。

と桃香は心の中で『馬鹿にしているのか』と富山弁で毒づいた。桃香の苦勞をねぎらっ
 ているように聞こえるが、ところどころに棘がある。それでも桃香はにこりと笑い、京
 介に言葉を返した。

「ご心配ありがとうございます」

前の女子高さえ廃校にならなければ、今頃自分は学年の副主任になれていたはずなの

に……

教えることが大好きだったから、彼氏も作らずにひたすら教師の道を歩んできた。そ
 の結果、今年の春から学年の副主任になれると聞いて、頑張った甲斐があったと喜んで
 いたのだ。

ただでさえ悔しい思いであるというのに、目の前の男は平気で桃香の心の傷を抉るよ
 うな言い方をしてくる。

二ヶ月前この予備校で働き始めた当初から目の敵にされている気がする。いや、ッ気
 がする。じゃなく、実際にされている。なぜだろう。私何か悪いことでもした？

とにかく桃香は京介から嫌われているらしい。だから桃香も彼のことの苦手だった。

自分より三歳も年下なくせに、カリスマ呼ばわりされているのも気に食わないし、何
 よりもその慇懃無礼な、妙な態度をなんとかしてほしい。

毎日顔を合わせるたびに文句をぶつけたくなる。だが、職場では清楚で、女らしくし
 ていようと決めているから、桃香はいつもぐつと我慢している。

あー。もうっ！ 帰ったら今日もさっそくゲームだー。

京介と違って、慇懃でも決してその下に無礼の文字がつかないナイトを思い浮かべる。
 彼とゲームしているだけでストレス発散になるし、心が安らぐ。

なぜならナイトは、絶対に桃香の神経を逆撫するような発言はしないからだ。

とにかく仕事を頑張らなきゃ。たとえ今はまともなクラスを任されていないなくても、手は抜かない。

そしていつかは有名大への受験対策クラスの講師になるんだ。
固く決心してから桃香は口を開く。

「山室先生も大忙しですわね。一昨日もテレビでお見かけいたしました。予備校講師としては私はまだまだ駆け出しなので、先生は憧れです。お時間の都合がございましたら色々と教えて下さいね」

完全無欠の社交辞令が決まったと桃香は思った。

それなのに、指先で眼鏡のフレームを押し上げた京介に鼻で笑われた。

「ふっ。なんですかそれ？ 普通の男ならデートに誘われていると思うところでしょうが、私には通じませんか？」

「え？」

何それっ！

単なる社交辞令じゃないのっ！

あまりにも腹が立って、頬がびくびくと痙攣した。

「いえ、私は本当に山室先生に色々とコツを教えていただきたいと思っと思っていますのよ？」

「本当かどうか……。とにかく私は騙されませんよ。では失礼」

口の端を上げ、皮肉たっぷりな笑みを浮かべて京介はその場から立ち去ろうとした。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

予備校の廊下だ。生徒も他の講師も歩いている。それにもかかわらず桃香は一瞬我を忘れて大声を出していた。

京介の腕を掴んで引きとめてしまう。

「なんででしょう？ 私にはもうあなたと話さなければいけないことはありませんが」
廊下の隅や、教室からそれとなく自分達の様子を窺われている。

あ、やばいかも……

視線という視線が自分の全身に突き刺さっている気がして、桃香はようやく京介の腕を放した。

「あ、ごめんなさいませ。スーツの袖に糸くずが……」

とっさにそう言って、糸くずを取るふりをして桃香は軽く頭を下げた。

「では、私も失礼いたします」

内心では、はらわたが煮えくり返っていた。

本当にどうして彼は私に意地悪ばかり言うんだろう？

京介は元々誰に対しても礼儀正しく、決して慇懃無礼ではない。桃香にだけなのだ。
こんな風に嫌味を言うのは。

仲良くなった他の女性講師や職員にそれとなく、彼って嫌な奴じゃないか、と聞いてもそんなことはないかと否定される。

実際桃香が観察したら京介の態度は誰に対しても丁寧だった。本当に自分以外は……どうしてなんだろう。なんで私ばかり……何がいけないっていうの？

京介だけだ。妙な嫌味を言ってくるのは。

実際に今まで職場でトラブルを起こした経験はない。

前の女子高でも生徒から信頼も人気も得ていたと思うし、この予備校で働くようになってまだ二ヶ月だけれども、さっきみたいに女子生徒に気軽に話しかけられる。

もちろん男性からだって、それとなく誘われたりする。

なのになんで？　なんであの男だけ？

悔しくて涙が溢れそうになってきた。

同時に大学時代の恋愛を思い出して悲しくなる。

『お前と一緒にいても、男といるみたいなのが気分になるからもう付き合えない』

当時付き合っていた彼氏に言われた台詞だ。

態度とか性格が男っぽくて嫌だと言われて振られたのだ。女友達にさえちょっとがさつだと言われた。もう少し女らしくした方がいいと。

だから……

努力したのに……

その努力が実ったからこそ、清く正しく美しくがモットーの名門女子高の教師になれた。地元の千葉では、その教職員になるのはものすごく難しいと言われていて、採用が決まった時は両親も喜んでくれた。

「先生。何かあったんですか？」

「ぼうっとしてるけど、大丈夫？」

桃香がこれから講義をする教室から何人かの生徒が出てきて、声をかけてくれる。

「ありがとう。大丈夫よ。ちょっと寝不足なの。ごめんさいね」

笑ってみただけどうまくごまかせたかどうか、少し心配だった。そして思う。

こんな気分になるのは全部山室京介のせいだと。

予備校の職員専用の駐車場の片隅で桃香は携帯をいじっていた。メールを見ているわけではない。やっているのはいつものゲームだ。

京介にむかっていたから、憂さ晴らしをしたかったのだ。早くゲームがしたくて、家へ帰るのもどかしく、つい携帯でゲームを始めてしまっていた。

パソコンでプレイするのがメインのゲームだけれども、携帯でもできる仕組みになっ

ている。ただパソコンと違って、誰かとチャットはできないしパーティーも組めない。できるのはソロでの狩りと、持ち物売買と、簡単なメッセージを誰かに送ることくらいだ。

それは不満だけれど、家に帰る前に少しでもすっきりしたかった。

本当はお酒でもひっかけたかった。が、今飲むととことん飲んでしまっただけで、明日二日酔いで出勤するはめになりそうだったから、やめたのだ。

それに少しでもお酒臭い息をしていると、また何か京介に嫌味を言われそうだし。だから仕方なくさつきからここで立ったまま、ゲームを続けていた。

「おらっ！」

ついゲームに夢中になって、ガラの悪い声を上げているのにも気づかない。今は五月末。陽が落ちてから長時間外にいても風邪をひくことはない。むしろ気持ちがいいくらいだ。

「よし、レベル一つ上がったー。やったー」

予備校内だということ忘れて、つい大声を上げてしまった。

「そこに誰がいるんですか？」

桃香の声に気づいたのだろう。突然、校舎の通用口から声をかけられた。

その声に驚いて桃香は携帯を取り落とす。

やばい。こんな所でゲームしているなんてばれたら、今まで築いてきたイメージが崩れちゃう。

「あ、すみません。驚かせちゃったかしら？ ちょっとメールが入っていたので……」

その場で思いついた言い訳を口にしながらか、落とした携帯を拾おうとしたが、勢いよく落としたせいで、通用口の方にまで滑って行ってしまった。

「僕が拾います」

桃香よりも早く、通用口にいた男が携帯を拾う。てっきり職員だと思ったのだが、よく見ると自分が担当しているFクラスの生徒だった。

爽やかな面立ちで、いつも熱心に講義を聞いてくれているから、すぐに顔を覚えた生徒の一人だ。

「どうぞ。あれ？ メール？ 大崎先生、これどこがメールなんですか？ ゲームじゃないですか？」

その男子生徒は携帯を上げしげと見つめていた。

「あっ！」

まずい。どうしよう……

さっと背中冷汗が流れる。

教職員に拾われるよりまし、と考えるべきかもしれないけれど、仕事の後、家にも帰

らずゲームに興じていたと噂になるのは避けたかった。

「ええっと……。その……。メールだと思っただけだけど、そのゲームのURLが出てて、指が滑って押ししてしまったのよ」

「そうですか」

男子生徒はしばらく携帯を見つめてから、笑顔で桃香に差し出した。

「拾ってくれてありがとう。でもあなた、ここは職員の通用口でしょ？ 生徒さんは……」

「あ、すみません」

桃香の言葉をさえぎって、男子生徒は頭を下げた。

「僕の家、こっちから出た方が近いんで。失礼します」

男子生徒は素早く桃香の横をすり抜けて道路へ出ていった。

ひゃー。まずい。ばっちり携帯の画面見られちゃったよー。

うまくごまかせたかなあ？

もう予備校でゲームにインするのやめなきゃ……

ここのところ予備校で携帯からゲームにインする頻度ひびどが高くなっている。ひよっとしたら自分が気づいていないだけで、誰かに見られているかもしれない。

もちろんゲームをするのは、休憩時間だし、トイレの個室や屋上や人目のない所でやっ

ているんだけれど……

ああ。でもっ。

と桃香はため息をはき出す。

あいつが、山室京介がいる限りやめられないかも。

今日みたいに京介に何か言われるたびに腹が立って、ストレス解消のためにインしていたのだ。

ゲームを始めたきっかけは前の女子高で生徒が休み時間にやっていたのを見つけたことだ。校内にいる時は携帯の電源は切らなければならなかったから、桃香は彼女から携帯を預かった。

さらになぜ規則を破るのかと問いたしたら、とにかくこのゲームはおもしろい、と生徒から延々と話を聞かされて、興味を覚えて桃香もやり始めた。

だが、桃香は生徒の手下にならなければならぬ教師だ。どんなにゲームをしたくても決して学校ではやらなかった。

なのに……。なのに……

全部あいつのせい。

京介の顔を思い描いてしまっただけで、桃香はその横っ面をひっぱたきたい気分になった。

ああ。早く帰ろう。

京介に対するイライラを早くゲームで鎮めたくて、駐車場を出た桃香は早足で駅へ向かう。

桃香の足音に重なる音が背後で聞こえ、ふと立ち止まる。

「ん？」

それに妙な視線を感じるような気がする。

誰かに見られている？

気になって振り返ったが、背後には犬を散歩させている老人しかいなかった。

曲がり角の多い入り組んだ路地なので、足音の主はどこかでもう曲がってしまったのかも知れない。

それでも気味が悪くて、桃香は身を竦める。

このところ、こういうことが頻繁にあるのだ。予備校に勤め出して、三週間ほど経った頃からだろうか……

たまに誰かに尾行びようされているような気がするんだけど……。あはは……。気のせい、気のせい。

とりあえず地下鉄つと。早く帰らなきゃ。今日もナイトがインしているといいな。

今週は討伐とうばつすると高い報酬をもらえるスペシャルクエスト期間だから、お金を貯めるチャンスだ。そしてとってもいい武器を買わないと。

あつという間に、桃香の頭の中は早く帰ってゲームをしたい、ナイトとチャットをしたい、という思いでいっぱいになった。

ゆきちゃん…こんばんわー。

大和…ばんわ。

喪男…こんばんは。

榎本…こんばんわん。

パソコンのモニターに、ゲーム仲間達の挨拶が次から次へと表示される。

平日の夜十時。ゲーム内のメンバーが一番ログインしてくる時間帯だ。

ゲーム内ではギルドという組織があり、さらに小規模なグループのクランと呼ばれるものがある。ギルドもクランも、チャットをメインにしたい、あるいはレベル上げを中心にやりたいなど、同じ目的を持ったプレイヤーの集まりのことだ。桃香も一つのクランに所属している。

同じクランに所属している人数は十五人くらいだが、常にインしているメンバーは五〜七人といったところだろうか。今表示されているチャットはそのクランメンバーのものだ。

もちろんナイトもこのチャットの場にいる。このクランに入ったのも、ナイトに誘われたからだ。

クインピーチ…いつもより遅い時間にこんばんは。

桃香も書き込む。

ナイト…ピーチさんこんばんは。今日はインが遅かったんですね。

桃香は軽く高揚する。クランメンバー全員ではなく、自分を名指しして挨拶してくれたのがたまらなく嬉しい。

クインピーチ…あー。ちょっとゴスロリ服買いに行ってたー、というのは嘘。職場出てからその場で携帯でレベル上げてた。だから帰って来るの遅くなってインも遅くなった。

喪男…あれ、本当ですね。ピーチの姉御のレベル、一つ上がっている。それにまだゴスロリ服買いに行っていないんだ！

桃香のキャラ、クインピーチはゴスロリ風の衣装を着ている。だからリアルでもいつかゴスロリ服を買うと公言していたのだ。

ゆきちちゃん…おめー。早くリアルでもゴスロリって下さいね。

榎本…おめです。

ナイト…おめでどうございます。

クランメンからの祝福の言葉が次から次へと画面に現れる。みんなが『おめでどう』を『おめ』と略しているのに、やはりナイトだけはきちんとした言葉で祝ってくれる。

クインピーチ…へへ。ありがと。

年齢も職業も知らなければ会ったこともないメンバー達だ。それでも桃香は彼らを自分の仲間だと思っている。だから素直に嬉しくなって、パソコンの前で満面の笑みを浮かべた。

携帯で一人でレベル上げをしても得られない喜びだ。一人だと本当にただのストレス

解消にしなければならないけれど、みんなと一緒にだと心がほんわかとしてくる。明日も仕事を頑張るぞ。京介にどんな嫌味を言われても耐えてみせる、という気力が湧き起こってくる。

レイナ…こんばんは。はじめまして。

克蘭メンバーの祝福を受けている時に、レイナという名のキャラクターが挨拶をしてきた。

レイナ…今日からこのゲーム始めました。ここ克蘭にお世話になります。

お。新人さんだ。

桃香はレイナのキャラをクリックする。今日から始めたと言ったのは本当らしく、まだレベルは三だった。職業は白魔術師だ。

クインピーチ…新人さんいらつしゃーい。よろです。新しい人が来るとワクワクするね。

仲間が増えたのが嬉しくて桃香は挨拶をする。

榎本…このピーチさん強いから、色々頼りになるよん。

レイナ…そうなんですか？ じゃあ、これからはお姉さまって呼ばせてもらいますね。クインピーチ…いきなりお姉さま？ 実際は私の方が年下かもだよ？

桃香は苦笑しながらキーボードを叩く。

レイナ…えー。だって、今強くて頼りになるって……。ところで、ピーチお姉さまのお仕事ってOLさん？

クインピーチ…え、いや……。えっと……

どう答えていいものか悩んで、手が止まってしまった。

榎本…あ、そーいや最近ピーチさん平日の昼にもインしてますね。夜中とかも。

そう指摘されて、桃香はさらに悩む。

ナイト…そういうえばそうですね。僕はさすがに平日の昼間は無理ですけど。

ナイトにも言われてしまつて、なんだか胃が痛くなる。

同じ克蘭のメンバーに限り、最終イン時間がわかる機能がこのゲームにはついていた。

クイーンピーチ…えっと私？　OLじゃないけど……

ここにいるメンバーはみんな仲間だと思つている。リアルの友人並に信頼している。それでも本当のことを答えるべきか桃香は少し躊躇した。正規の教師ではないから、なんだか恥ずかしいような気がする。

それに、レイナは今日入ってきたばかりだし、どんな人物なのかまだ掴めていないから答えにくい。

お姉さまと慕つてくれたのは嬉しいけど……

喪男…前に教師やつているって言つてなかった？　女子高の。

榎本…そうそう。先生だ！

ゆきちゃん…実は私の担任ですw

大和…マジ？

ゆきちゃん…冗談に決まつてるじゃんw

大和…だよねーw

喪男…w w w w w w

笑いを意味する「w」がずらりと並び、「うわっ」と桃香は赤くなる。

本当に教師だった頃は自分の職業や生活に自信を持っていた。学年副主任を目指して毎日頑張つて働き、恋人こそいなかつたけれど、とても充実した毎日を送っていた。

けれど今は充実しているとは言えない。

レイナ…学校の先生なんですか？　私は大学生です。馬鹿で有名な女子大ですけど。講義のない時にインしたり、昼休みにネカフェからインできる身分です。

クイーンピーチ…う、うん。まあ……先生やつてるけど……

レイナ…じゃあピーチさんもお昼休みにネカフェ派なんですね。

榎本…学生かーうらやまー。
 ゆきちゃん…私も早く大学生になりたいー。
 喪男…え？ 高校生？
 ゆきちゃん…浪人です（汗）。

みんなの発言が続いたおかげで、教師は教師でも予備校の契約講師だと言わずにすんでほっとした。

ボン。

ふいにダイレクトチャットを知らせる音が響いた。

ナイトからだ。

『何かあったんですか？』

なんでそんなことを聞いてくるのだろうと桃香は首を傾げる。

『何かあって？』

『いえ、今日も職場を出てから携帯でインしていたとか……。それにここ数ヶ月、確かに平日の昼間や、夜中にもインしているみたいなので、少し気になって……。何か嫌なことでも？』

あっ……

桃香の心臓が跳ね上がった。ナイトが自分を気遣ってくれているとわかったからだ。

ひよっとしたら自分の知らないところで、他のメンバーにも色々と気を遣ってダイレクトチャットやメッセージを送っているのかもしれないけれど、特別扱いされているような気分になる。

桃香がナイトに恋心に近い感情を抱いているのと同じくらい、ナイトもきっと自分に気に入ってくれている。そんな風に思えてしまっただけで仕方ない。

馬鹿だなー私……

ナイトが女だっただけの可能性もあるのに。でも気になってしょうがない。もっとナイトと親しくになりたい。

思い切った携帯のメアドを教えようかと思う。ゲーム内でチャットしているだけでは物足りないのだ。

もっと、もっとナイトのことを知りたい。親しくになりたい。

『なんとなくピーチさんは嫌なことがあると、頻繁にインしている気がして僕は心配です』

『ありがとう。ちょっと職場に嫌な男がいてさー。毎日ムカついているんだー』
 ナイトにならなくても話せてしまい、つい愚痴を書き込み始めてしまう。

『私が何をしたらってわけでもないんだよー。なのにいつつも嫌味言うんだ、そいつ』

『ピーチさんに？ ピーチさんの竹を割ったような性格が僕は好きなのにな。嫌味を言うなんて失礼な人ですね』

好き？

どくんと心臓が大きく脈打つ。

ナイトの好きは単にピーチの性格が好き、というだけで桃香本人を好きだと言っているわけではない。それでもドキドキしてしまい、桃香はパソコンの前で赤くなったり、にやついたりを繰り返してしまふ。

『あはははー。好きって。勘違いしちゃうよ？ っていうか何も出ないからー』

『好きですよピーチさん。強いし、女々しくないし、パーティー組んでも、その姉御肌でみんなをまとめているじゃないですか』

やっぱりナイトはゲームプレイヤーとしての桃香、いやクイーンピーチが好きなのだと思いますがっかりしてしまふ。

『何か困ったことがあったらいつでも言ってください。僕でよければ相談に乗ります』それはリアルで嫌なことがあった時に相談しろと言っているのか、それともゲーム上でのことなのか、桃香は判断に困った。

ここであなたが気になるのだ。リアルでも連絡を取りたい。そして色々愚痴を聞いてほしいと言ったら、ナイトはどんな反応を示すだろうか。

『いつでも本当に僕が守りますよ？』

ナイトのその書き込みを見て、桃香はまた幼馴染みの男の子に似たような台詞を言われたことを思い出す。とても懐かしくてなんだか涙が出そうな気分だ。

同時に右の掌てのひらの古傷が疼うずいた。

富山の祖母のもとに預けられていた頃、桃香はいわゆるガキ大将的な存在だった。

男も女も年齢も関係なく、何人かの自分を引き連れて遊び回っていた。

確かこの傷は……

と、桃香はマウスから手を離し、傷跡を見つめる。

何人かいた自分のうちの誰かが年上の子たちからまれていて、それを助けに入っていたときについた傷だ。相手は小学校の高学年で、まだ小学校二年の桃香には分わかが悪わるい喧嘩だった。

桃香が助けに入ったすきに自分は仲間を集めて、逆に桃香を守るんだと叫びながら相手に飛びかかっていた。

結局喧嘩に気づいた大人が割って入ったことにより、その場は収まったけれど、いつ怪我したのか桃香の掌は切れていて、その後なんと五針ぬいも縫ったのだ。

うっすらとだが、まだ痕が残っている。

『ピーチさん？ 何かありましたか？ 大丈夫ですか？』

子供の頃の思い出に浸りすぎていて、ナイトに返事をするのを忘れていた。

『うおっ。ごめん。ちよっと考え事してた』

これが職場なら、「ごめんなさい。考え事をしていました」と答えるところだが、ゲームの世界では自分を取り繕う必要はない。

本当はいつだって、子供の頃のようにありのままの自分でいたい。大口を開けて笑ったり、頭にきた時には言い返したりしたい。

でもそんな地を出しまくった結果、彼氏に愛想を尽かされてしまった。それは桃香にとって結構なトラウマだ。それに……

子分達に慕われていた思い出と同時に、子供の頃にも誰かに桃香ちゃんは男の子みただと言われた記憶までよみがえってきってしまった。

あれ、誰だったんだろう？

桃香の子分は何人もいて、勝手に呼びやすい名前をつけて遊んでいたために、本名はろくに覚えていなかった。

顔だって、もう覚えていない。彼らに今会ってもわからないだろう。

ナイトと重なってしまうあの年下の子の顔すら、よく思い出せないくらいなのだ。

『考え事？ やはりそれは職場での嫌な男のことですか？ 相当ストレスが溜まっていくんでしょ？』

『あ、うん。ストレスはそりゃあるよ。けど今考えたのは子供の頃のこと』

カチャカチャと桃香はブラインドタッチをする。ナイトの入力も速くて、チャットで間が開くことはない。

『私さーけっこうなガキ大将で。子分作って遊んでた。でさー自分達より年上のグループと喧嘩したことがあってさ。なんかそれを唐突に思い出したよ』

『それ、今も変わってないじゃないですか。クランのメンバー達やここでの友達とパーティー組んで、みんなを率いて強いモンスターに向かっていく』

『あははは。そうかもしれない』

実際に声を立てて笑いながら、桃香はキーボードを打つ。

『そういえばピーチさん、確か富山ですよ？』

『んっ？』

なんだか唐突な質問に思えて桃香は首を捻る。

『この間富山弁使っていたじゃないですか。だから富山の方なのかと思ったんですが……。あ、すみません。立ち入ったことを聞いてしまいました』

『あ、いやいや。別に聞かれても困らないよ？』

さすがナイトだなと思う。他のメンバーならもっと遠慮なく聞いてくるんじゃないかという場面でも自制する。

前に高校教師をやっているとメンバーに知られてしまったのも、突っ込んで聞いてくる相手をうまくかわせなかったからだ。

でもナイトなら、もっと色々突っ込んで聞いてもらいたい。

『子供の頃ねー富山にいた。今は違うところに住んでるけど』

『なんとなく思い描けます、ピーチさんの子供時代。自分より強い相手に立ち向かっていつて怪我とかしょっちゅうしてたりして』

まさにその通りだ、と桃香はくすくすとモニターの前で笑う。

『そそ。怪我したよー。男の子みたいって言われたしい。ゲームで戦っている時にもなんか血が滾って、その時の右の掌の古傷が疼いたりしてさー』

『右の掌の古傷？』

そうナイトが書き込んできたが、いつもより少し間があつて、桃香は何かまずい発言をしてしまったのかと思ひ、ひやりとする。

『ん？ それが何か？』

『いえ……。それよりそろそろ落ちますね。明日も仕事なので』

『あーそうだよね』

モンスターを狩るのに夢中になり過ぎて、時刻を見ると十二時を回っていた。できればまだチャットを続けたかったけれど、普通の社会人は朝から仕事のことが多いから、

ナイトももう寝なくてはならないのだろう。

今の桃香は、週四日の勤務形態の上、午後しか講義がない日もあつたから、たまに、そのごく当たり前のことを忘れてしまうのだ。

『でももう少しならお付き合いできますよ』

ナイトの言葉に胸がきゅんとなる。

『本当に？ 付き合いってもらえる？』

『ええ。もちろん。他ならぬピーチさんの頼みですから』

ますます胸がきゅんとして、桃香の頬に朱がさした。

付き合いしてくれるって……。他ならぬピーチさんの頼みだつて……

もう嬉しくて仕方がない。

『あ、でも……』

と、桃香は我に返る。ナイトがどんな仕事をしているか今まで聞いたことはないし、ナイトも具体的には語らないけれど、本当にこんなに夜遅くまでゲームをやつていて大丈夫なのだろうか。

『朝、早いんじゃないの？ 平気？』

『はい。職場は家から近いので、少しくらい寝るのが遅くなっても大丈夫ですよ。でもピーチさんこそ平気ですか？ 学校の先生は普通の会社より出勤時間がずっと早いはず

では？」

ナイトも、他のゲーム仲間と同じようにピーチの職業は高校の教師だと思っている。それを桃香は訂正できない。

『えっと、今学期から担任外れたから、受け持ちの授業に間に合えばいいんだ』
とつさに嘘をつく。

『そうなんですか？ ひょっとしてそれで最近はずっとか夜中にもログインできるってことですか？』

『うん。まあ、その、だからストレスというか……』

嘘をついているうしろめたさで、桃香の胸は苦しくなる。

『担任外されて、ショックだったんですね。なんかわかります。しかも嫌味を言う同僚がいるというわけですね』

『そうそう。そうがや』

ナイトに嘘がばれなかったのと、優しく気遣われたことで、気が少し緩んで桃香は富山弁を使ってしまった。

『それ、また富山弁ですね？』

『ちゃー。なんかつい出ちゃうね。もうずっと関東で暮らしてるのにさー』
『でもそういうものなんじゃないですか？ 僕もうっかり出る時ありますよ』

『え？ そうなんだ』

なんとなくナイトは東京生まれの東京育ちだと思いついていたから、桃香は少し驚いた。

『どこの出身？ と書きかけてやめる。』

他のキャラ相手にならなんでも聞けるのに、ナイトにはできない。うざいと思われて嫌われたくないのだ。

らしくないな、と桃香は自分でそう思う。このゲーム世界では素のまま、怒ったり、派手に笑ったりしている。他のゲーム仲間なら地のままの自分を出して、嫌われるかもしれないなんて考えないのに、ナイト相手だとためらってしまう。

うーん。これってやっぱ……

と、桃香は一瞬キーボードから手を離し、自分の胸に手を当てた。

恋する乙女？

そう思ってから、中学生じゃあるまいしと苦笑する。

らしくない。らしくない。

頭をぶんぶんと振って、思い切ってナイトの出身地を聞こうとキーボードに手を戻した。その瞬間、パーティーを組んで欲しいという『申請』の音が響く。

タイミング悪いな、と思いつつも誰からの申請だろうかと見てみると、今日からゲー

ムを始めたと言っていたレイナだった。

『すみません。級上げの昇格討伐を助けてもらえますか？』

『あ、ちよっと待って』

とりあえずレイナに返信してからナイトとのチャットに戻る。

『今、レイナさんから級昇格を手伝ってくれて言われた』

『じゃあ、僕もお付き合います。それにしてもレイナさん速いですね。もう級昇格するなんて』

ナイトに言われて、それもそうだとレイナをクリックしてみると、もうレベルが十に上がっていた。

レベルが十になるまではどのキャラも初級だ。十から二十五が中級。二十五から三十五で上級で、レベルに従って、モンスターを狩りに行ける場所が少しずつ増える。

レベルが上がれば上がるほどランクアップするのに経験値が多く必要になるから、級を上げるのにも時間がかかる。が、レベル十までならさほど時間はかからない。

それにしても、ついさっき始めたばかりのレイナがもうレベル十なのは課金したとして考えられない。

課金とは、クレジットカードやウェブマネーを使ってゲーム提供元にお金を支払い、アイテムのクジを引くシステムのことだ。そのクジを引いて、いい武器や防具が手に入れば、短い時間でモンスターを倒せるから、レベルが上がるのも速い。だが、課金クジを引いても必ずいい武器や防具が手に入るわけではない。クジだから当然当たりとはずれがある。だからいい物を手に入れようとしたら、一回三百円の課金クジを何十回も、場合によっては千回近く引かなければならないのだ。

そうやって引き続けて、気づけば何十万も課金している『課金魔人』と呼ばれるプレイヤーもいる。

『ほんとだ。さてはレイナさんしょっぱなから、何回も課金クジひいたんだな』

『そうですね。いい武器や防具を持っているみたいだから、かなり課金したんでしょうね』
キャラクターをクリックすると、そのキャラクターがどのマップにいるかわかるだけでなく、どんな武器や防具を身につけているかもわかるのが、このゲームの特徴だ。

ナイトはレイナのキャラクターをクリックして、確認したらしい。桃香もレイナをクリックして確かめる。レイナは課金でしか入手できない物を身につけていた。これならレベルが速く上がるのも納得だ。

『とりあえずレイナさんのお手伝いに行きましようか』

『うん。今レイナさんに返事する』

本当はナイトと二人だけで遊んでいたかったけれど、手伝ってくれと言われて悪い気はしなかったので、レイナの級昇格に手伝いに行くことにした。

やだ。また来てる……

予備校の職員室の自分のデスクの上いつもの封筒が置いてあるのを見て、桃香は眉をひそめた。

担当講師に何か質問したいが、他の講義に追われて暇がない。そんな生徒のために校内に講師宛のレターボックスが設置されている。

レターボックスの中に入れられた物は、事務職員が回収し、宛名を確認して各講師のデスクに置いて行く。そして講師は質問の回答を生徒用のボックスに投函とうかんするというシステムになっている。

だが、最近ほとんどの生徒がメールで質問してくるので、予備校側ではレターボックスの廃止を検討していた。そんな中、近頃毎日のように桃香宛の手紙が入っているのだ。

それも「個人的に勉強を見てください」とか「女らしくて上品なあなたが好きです」、あるいはあからさまに「先生とSEXしたい」といった内容で、勉強とは全く関係ない

ものばかりだった。

京介のデスクの上にもレターボックスに投函されたと思われるかわいらしい封筒や、小さなプレゼントの包みが置かれている。けれど、あきらかに桃香に送られてきた物とは違う。

気持ちにはわかるんだけどね……

桃香は京介のデスクに置かれている物と自分の物を見比べて、ため息混じりの苦笑をもらした。

京介は女子生徒に人気があるから、面と向かって告白できない女の子達がレターボックスを利用するのだ。

それに比べて、私に来るのはふざけたものばかり。

そう思いつつも、桃香はデスクの上の紙の束を手に取り、念のため何枚かに目を通す。直筆のものもプリントアウトしたものもあるから、複数の生徒がからかい半分で投函しているのだとわかる。本当に京介の所に届けられるものとは大違いだ。

宛名さえ書けば無記名でも届くから、全部からかいやお遊びなのだろう。真剣に何か書いて送るのなら、きちんと名前を記載するか、メールで送ればいいのだ。

生徒に公開している各講師のメールアドレスはもちろん予備校側が用意したものだ。そこに生徒が送る時は学籍番号を入れないと、メールが届かない仕組みになっている。

馬鹿な内容のメールを送ってアドレスから個人を特定されたくないから、レターボックスを利用して送っているのだろう。桃香はあきれて軽く首を振った。

それにしても……

「いつもあなたを見えています……。あなたのファンより……か……」

青いカードに書かれた文字を見て、桃香は少し嫌な気分になって思わず呟いていた。

「ん？ 大崎先生、今何か言いましたか？」

誰もいないと思ったのに、通りかかった講師に聞かれてしまったらしい。

「え？ あ。ごめんなさい。ちょっとした独り言でしたの。お耳を煩わづらわせてしまつて申し訳なかったですわ」

今の眩くらきくらいなら、仕事上の顔と真逆というわけではない。だから大丈夫だろうと思うのだが、それでも桃香はドキドキした。

危ない。危ない……。気をつけないと……

でもこのカードなあ……

ここ最近、毎日青いカードが入った封筒が届いていた。文面もいつも同じだから気持ち悪い。

他のものは、あきらかにふざけているとわかるけれど、この青いカードだけはなんだかそれとは違う気がしてならない。

本気で私が好き？

京介に面と向かって告白できない女の子のような、シャイな男子生徒からの告白なのかもしれないけれど……。でもあまり気にしても仕方ないか。

桃香は真剣な告白のつもりなら申し訳ないけれど、と思いつながらも、他のふざけた手紙と一緒に青いカードをゴミ箱に入れた。

「ちよ、何これ……」

帰宅して、桃香は届いていた郵便物の整理をしながら思わず声を上げていた。

ほとんどがダイレクトメールばかりなのだが、その中に予備校のレターボックスに届いていたのと同じ青いカードが入った封筒が交じっていたのだ。

「えっと……」

一瞬混乱する。

封筒に入っているし、宛て名も書かれているが、消印が押されていない。いつものようにカードの文面も全く同じ。プリントアウトした文字で、「いつもあなたを見えています。あなたのファンより」と書いてある。

鳥肌が立った。

まさかストーカー？

そういえば、誰かに尾行びこうされてる気もしていたっけ……
でも、でも……。まさか……。それにいったい誰が？

信じられなくて、ぼうっとしていると、パソコンからチャット着信の音が鳴り響いた。桃香は家に帰るとすぐにパソコンを立ち上げ、着替えるよりも何をやるよりも早く、いつものゲームにログインしている。もうそれが日課になっているのだ。

インして仲間に挨拶をし、「これから着替える」とか、「夕ごはん」とか書き込んで、そのまま用をすませます。

そして用が終わると、「ただいま」とか「風呂から出た」などと書き込んで、仲間達と遊ぶのだ。

今もパソコンの前に座りながら、郵便物の整理をしていた。

ナイト…こんばんは。

見ると、ナイトがログインしてきて、挨拶をしている。

そのとたん、桃香は嬉しくなって、青いカードのことなどどうでもよくなった。いや、どうでもいいわけじゃないけれど、ナイトとしゃべりたい気持ちの方が勝ってしまったのだ。

クイーンピーチ…こんばんは。

ナイト…あ、ピーチさんこんばんは。

レイナ…あれ、お姉さま、用事は終わったんですか？

クイーンピーチ…うん。終了。

大和…あーじゃあ、みんな、海岸行ってレベル上げでもしよう。

レイナ…ぜひー。私のレベルけっこう上がったし。

レイナはあつという間にゲーム内でのレベルやクラスを上げて、桃香達と同じマップで遊べるようになっていた。そして何かという桃香にくっついてくるのだ。

それだけなつかれて嬉しい反面、ナイトと二人つきりになる機会が減ってしまったのは少々残念だ。

そのまま桃香はゲームではなくチャットに没頭してしまい、カタカタとキーボードを打ち込む音ばかりが彼女の部屋に響き始めた。

クイーンピーチ…げっ、やばいもうこんな時間。そろそろ寝なきゃ。

ナイト…おや、今日は早いんですね、もう寝るんですか？ 僕はまだ少し大丈夫なん

ですが、残念です。

桃香が書き込むと、ナイトがすぐに反応してきた。さっきまで一緒だった大和は明日は朝が早いからともうログアウトしている。

レイナ…朝から講義なんですか明日は？

レイナが問いかけてくる。

クインピーチ…そうそう。明日は朝一講義なんだー。だからもう寝るー。

ナイト…講義？ 授業ではなくて？

あ……。そうだった。私まだ高校教師ってことになってたんだっけ……

レイナ…え？ だって講義でしょう？ ピーチお姉さま、最近予備校の先生になったっ

て……

レイナがそう答えながら、自分のキャラクターに首を傾げさせた。

クインピーチ…あれ？ 私そんな話したっけ？

そこまでレイナに話した記憶はないが、いつもノリでチャットをしているので、知らないうちに言っていたのだろう。

レイナ…聞きましたよ。

レイナが今度は『笑う』。

じゃあやっぱり話したんだ、と桃香は納得した。

ナイト…そうなんですか。そういうお話をするくらいお二人は仲がいいんですね。

レイナ…そりゃ、女同士だし。ね、ピーチお姉さま。

クインピーチ…うん。そうそう。

ナイト…なんだか妬げますね。僕だけ仲間はずれな気分です。

ふふ。ナイトが妬いてる。なんか嬉しいかも。
桃香の顔がにやけていく。

ナイト…ところで、朝は何時に起きるんですか？

クインピーチ…んー。予備校まで一駅だし、朝一って言っても、九時からだから、そんなに早く起きなきゃならないわけじゃないんだ。でもうちの予備校、早朝講義つてのがあってさ……

そこまでキーボードを打つ。ゲーム内チャットは文字制限があってあまり長々書けないのだ。

ナイト…もうそれくらいにして寝ないと身体を壊しますよ。ピーチさん。

桃香が続きを打とうとする前にナイトが発言する。

クインピーチ…大丈夫。まだ起きてる。

さつきはもう寝なきゃ、と言ったのにもかわらず、桃香は正反対のことを書き込んでいた。

ナイトに心配してもらえたのが嬉しくて、もうしばらくチャットしていたくなったのだ。それにレイナとしゃべっているのも楽しい。

クインピーチ…一駅だし、アパートも予備校も駅から徒歩十分だから、少しくらい寝坊しても平気。平気。

レイナ…確かにあの予備校は近いですね、駅から。

ナイト…あの予備校？

ナイトは『首を傾げて』いる。

ナイト…まるでピーチさんが勤務している予備校がどこにあるか知っているみたいですね。

レイナ…はい。だって、早朝講義のある予備校って、朝陽アカデミーだけじゃないですか。クインピーチ…さてはレイナさんうちに通ってた？